

2014年度 SFC 政策研究支援機構 最終報告書

離島と都市を結ぶ起業家育成型スタディツアーの実践による地域活性化モデルの段階的構築

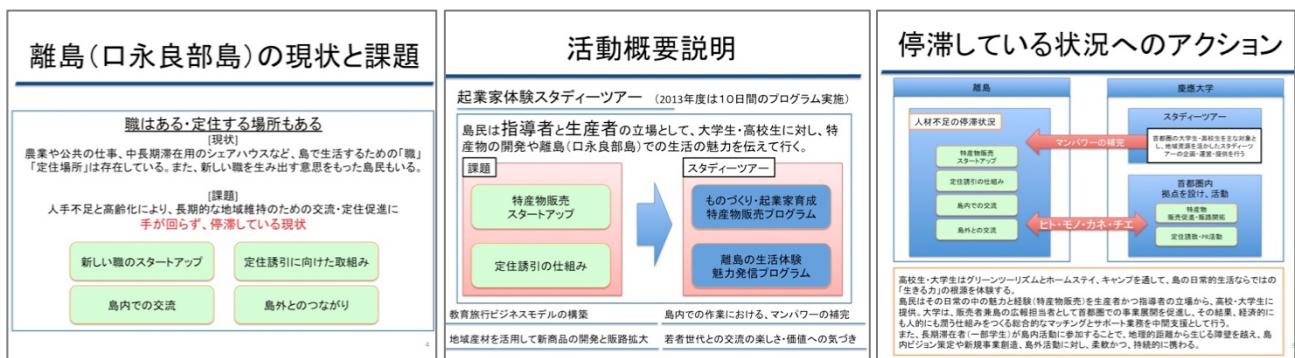
～人口 140 人の離島・口永良部島を事例として～

文責：長谷部葉子研究会 口永良部島プロジェクト

遠藤 紅実

1：研究目的

当プロジェクトは、鹿児島県熊毛郡屋久島町の隣に位置する人口約 140 人の離島、口永良部島を拠点としたプロジェクトである。2011 年より SFC 政策研究支援機構の協力も得て、現地の方々と継続的に「協働」し、対等に議論を交わせるようになるまでの 4 年間を経て、島民の方々とともに見出した「子々孫々と持続する島社会の創出」というビジョンのもと活動を行っている。また、屋久島町役場や鹿児島県庁企画部離島振興課、さらに東京都私立郁文館夢学園グローバル高等学校との関係性をも構築することで、離島・大学・行政が連携した都市と離島との持続的な交流を生み出す一大プロジェクトとなった。2013 年には島内に 1 年間の長期滞在者を迎え入れていただくなど、現地にも慶應という存在が徐々に根付いてきている。このような経緯を踏まえ、今年度は「子々孫々と持続する島社会の創出」に向けた、離島と都市圏の大学両者がイニシアティブを持ち、「協働」で実践する『離島と都市をつなぐ起業家育成型口永良部島スタディツアーによる新しい地域活性化モデルの構築』を目的として、活動を実践した。



(左から『口永良部島の現状と課題』『スタディツアーの活動概要』『口永良部島の課題に対するアクション図』 政策研究支援機構 最終報告プレゼンより)

2：活動成果

2014 年夏、当初の計画通り口永良部島でのスタディツアーとフィールドワークの実施を行うため関係者一同は屋久島へわたった。しかし、8 月 3 日に起きた突然の口永良部島新岳の噴火により、口永良部島島民は数日間に及ぶ屋久島への自主避難を余儀なくされた。当然、我々のプロジェクト活動も変更を余儀なくされた。このような経緯の中での活動成果について、以下に報告する。

①高校生離島研修(起業家育成型スタディツアー)の実施

スタディツアーは、当初口永良部島で予定していた活動により近い体験を屋久島で提供するべく、急遽カリキュラム変更を行った。東京へ戻った後には、郁文館夢学園グローバル高等学校の学園祭である郁秋祭にて、実際に屋久島で作成した夜光貝アクセサリー(貝は口永良部島のもの)を展示しつつ、口永良部島の方がつくられた夜光貝アクセサリーの販売と作成体験コーナーの設置し、ものづくりの実体験に基づくストーリーを語りながら、販売促進を行った。また、夜光貝アクセサリー作成以外の体験を屋久島にて体験した生徒についても、今回の研修概要について、また噴火を通して口永良部島について、そこから感じたこと、学びなどを落とし込み、情報発信として「展示」と「語り」を行った。

また、今年度の活動について高校生の声なども交えながらまとめた「口永良部島プロジェクトリーフレット」を発行し、ORFなどで配布した。

夏期活動スケジュール	
8/1 大学生が屋久島にわたる	①夜光貝 「内容」 アクセサリー製作、調査 「目的」 モノづくりを通じてモノの成り立ちを学ぶこと
8/2 高校生が屋久島に到着 講義①長谷部栄子教授による3枚の絵 ②細井洋介氏による映像	
8/3 島への移動準備 講義③池田靖史教授による建築 ④梶方麗氏によるコミュニティ論 「口永良部島噴火」→屋久島での活動へ	②ジャム 「内容」 ジャムの生産過程見学、体験 「目的」 ものの里方を変える、身近な仕組みに興味を持つ
8/4 各プロジェクト活動 高校生と大学生の本音を語る会	
8/5 口永良部島の方々が避難している場所へ訪問	③生活体験 「内容」 お茶積み体験、自炊 「目的」 のからしを作る経験、またそれを発信すること
8/7.9 振り返りの会(都内)	
	④建築 「内容」 シャワーブースの模型作り 「目的」 →モノづくりの楽しさを知る、地域性を知る



(左から『スタディツアー下記活動スケジュール』『スタディツアー各プロジェクト活動実施概要』『口永良部島プロジェクトリーフレット一部』)

②口永良部島との活動

8月の噴火による口永良部島島民の自主避難の際、炊き出し支援や、子どもたちに向けた寺子屋・スポーツワークショップの実施をした。このことは、2015年1月に屋久島町から表彰していただいている。11月には噴火をふまえた島民の方へのインタビュー記事を載せた冊子『夢出づる島 vol.3』を発行し、SFCのORFで配布した。これらの活動は口永良部島プロジェクトが今後も口永良部島との活動を継続させていくという意志表示であり、島民との関係性をより深める契機となった。

また、『フィールドワーク型プロジェクトのリスクマネジメントとサステナビリティ』をテーマに行ったORFトークセッションでは、島民の方や屋久島町長にも登壇していただき、「慶應がきてから言葉・議論による活性化が生まれた。次は形に見える活性化を生み出したい」との言葉もいただいた。島民の方からも、今後とも口永良部島プロジェクトとの活動継続の意志を確認することができ、一時期双方に過った噴火によるプロジェクトの継続性に対する不安は、一掃された。

③次年度以降の活動にむけた土台づくり

今回の活動を経て、島民の方々からも口永良部島プロジェクトとの協働への希望の声が実際にあがってきている。そこで、来年度以降、継続的に大学生を長期島滞在させる新たな施策「大学生地域派遣制度」について、実現化させていきたい。

12月と1月には、プロジェクトメンバーの平田と菊地がそれぞれ1ヶ月島内に滞在し、この活動について島民から意見やフィードバックのヒアリングと合意形成を行った。平田については、屋久島町役場と鹿児島県庁にも当概要についてプレゼンテーションを行い、行政視点のフィードバックも仰いだ。2015年2月には、大学生地域派遣隊パイロット版と称し、口永良部島プロジェクトメンバー以外のSFC学生がフィールドワークの単位をとりながら約1週間滞在し、今後多種多様な専門分野を持った学生が地域に腰をすえて研究活動することについて、学生側の教育的価値と地域にもたらす変化の有効可能性について検証した。

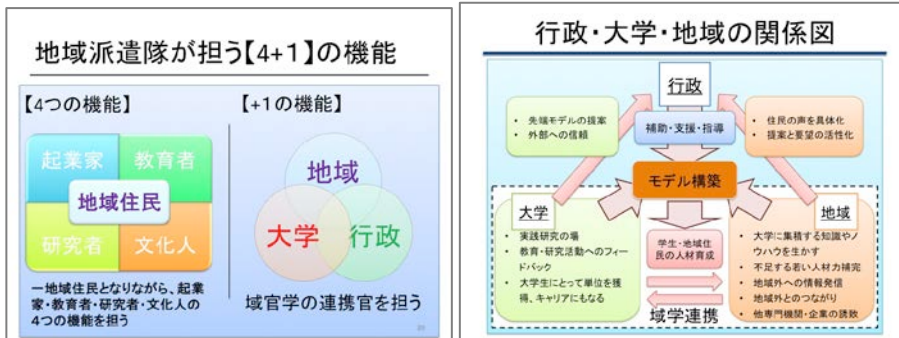
また2014年11月からはプロジェクトメンバーの一人である永由が屋久島町役場にインターンシップ活動をしており、地方創生の各種事業補佐としてこの活動の島にとっての有効性についても考察している。

3：今後の研究展望

上述した通り、今年度の活動をふまえて、来年度以降は大学生地域派遣隊の実現化を目指す。(高校生離島研修については、引き続き活動を行う。)大学生地域派遣制度とは、大学生が地域に半年から1年間、単位をとりながら島に滞在することのできる仕組みである。学生は、一地域住民としての役割を担い、島での生活を体感しながら、各々の研究活動について腰を据えて取り組むことができる。地域派遣制度は、このような大学生の存在が地域に新たな刺激を起し、停滞している状況を打破し、子々孫々と続く島社会への実現へ向け

たアクションを生むプラットフォームになると考えている。現在、来年度以降に地域派遣隊として滞在することを希望している学生が複数名おり（専門は米農業と教育）、島民との合意形成も大まかにはとれており、実現可能生としては非常に高い。

来年度秋からの実現を目指し、この制度のカリキュラム化や詳細を議論して、活動を進めていきたい。



(左から、『地域派遣隊が地域で担う機能』『大学生地域派遣制度に関する、行政・大学・地域の関係図』)

4：最後に

研究フィールドである口永良部島新岳の噴火など、大きなアクシデントにも見舞われましたが、今年度も SFC 政策研究支援機構助成金のもと無事に来年度以降につながる活動を行うことができました。みなさまのご支援とご指導、本当にありがとうございました。心より御礼申し上げます。今後とも、何卒よろしくお願い致します。

【参考：2014 年度 主な学生フィールドワーク実施記録】

- ・ 2013 年 8 月～2014 年 8 月：長期滞在：1 名
- ・ 8 月：スタディツアーの実施：全員（約 1 週間）
 - 自主避難島民への炊き出し支援、ヒアリング：4 名（約 1 週間）
- ・ 11 月：現地調査：1 名（約 1 週間）
 - 屋久島長期滞在開始：1 名（約 1 年半）
- ・ 12 月：大学生派遣隊ヒアリング活動：1 名（約 1 ヶ月）
 - ：ヒアリング活動：3 名（約 2 日）
- ・ 1 月：大学生派遣隊認知活動、口永良部島島内新規地域への挨拶活動：1 名（約 1 ヶ月）
- ・ 2 月：大学生地域派遣隊パイロット版の実施：6 名（約 1 週間）
- ・ 3 月：ヒアリング活動、新規プロジェクトメンバー挨拶：3 名（約 2 週間）

(政策研究支援機構 最終報告プレゼンより)